



タイレスの未完成感は、オバマのことばとセットになることで「強烈な期待感」へと変化する
Photo:ロイターアフロ

エレガンスの社会学

その着なしに理由アリ

文 中野香織

第12回

実 は今回、はじめに編集部から寄せられたギモンは「男のネクタイはいま、どういうことになっているのか？」というものであった。

というのも、2007年はノータイ姿の印象を鮮烈に残す男性が話題をふりまいたからである。安倍前首相の「はずされた」感のあるノータイ姿、亀田父の「そんなキウクツなきまりはオレの辞書にはない」的なノータイ姿、橋下弁護士「茶髪風雲児あらため少しだけきりっと府知事候補」なノータイ姿、小泉元首相のご隠居風ノータイ姿…。人生いろいろ、ノータイいろいろ。あ、いま日本語の慣例にならって「ノータイ」と書いたが、これはあくまで和製英語である。正しい英語では「タイルズ(Tails)」と表現する。

と というわけで、語り甲斐のある「タイレス」なスタイルはあるのか？とあらためて探してみたところ、一人の男性に目が釘付けになった。次期大統領候補として急速に人気を高めているアメリカ上院議員、バラク・オバマである。「アフリカ系アメリカ人」といつても、父はケニア人、母はカンザス生まれの白人で、人種や民族が入り交じるハワイで育った。ハーバード大学法科大学院在学中には学内法律論文雑誌の編集長も務めたほどの秀才で、二人の娘の

父でもある46歳。オバマが公の場に現れるスタイルの特徴といえば、公開討論会などの壇上ではネクタイをしたスーツ姿でできることもあるが、人々の心に直接語りかけることをねらう場では、圧倒的にタイレスである。

オ 人気テレビ番組のゲストとして出演するときには黒いスーツにオープンカラーのシャツ。民衆のなかにじかに入っていくときにはジャケットなしでシャツの袖をまくりあげている。チノパン姿で演説することすらある。この「タイレス」スタイルはオバマの場合、何を意味するのだろうか？と軽い気持ちで調べ始めたところ、いやー、ハマった。一夜にしてセンチションを巻き起こしたという2004年7月27日の民主党大会の演説を聞いて(ネットで生の声を聞ける、ありがたい時代)、鳥肌が立った。「リベラルなアメリカも保守的なアメリカもない。アメリカ合衆国があるだけだ。黒人のアメリカも白人のアメリカもラテン系アメリカもアジア系アメリカもない。アメリカ合衆国があるだけだ。:(中略):イラク戦争に反対する愛国者も戦争を支持する愛国者も、同じ合衆国の国民である。われわれすべてが星条旗に忠誠を誓い、われわれすべてがアメリカ合衆国を守っているのである」

この演説は、歴史に残る。試験に出る筈。リンカーンやケネディの演説のように。この部分以外を留めても、自分の個人的な生い立ちや未来への希望を、アメリカの歴史と未来に重ね合わせて語るあたり、絶妙である。長い政治的暗黒の時代が終わり、明るい未来が訪れるだろう。ありがとう。神のご加護がありますように」と演説を終える頃には、オバマのお父さんやお母さんを含めた

タイレス(ノータイ)のカリスマが発するメッセージ

彼の個人史と夢、合衆国の壮大な歴史と未来がすっかり二重うつしになって聴衆の心の目に焼きついている。すこいのは、歴代の大統領のようにスピーチライターが書いた原稿ではなくすべて自分のことばであるという点。たいへんなインテリでありながら演説はけっして「レクチャー」にならず、大衆の心に届くことばで、「変化」や「希望」、アメリカンドリームを語りかける。それを抽象的な夢物語にせず、現実的な政策もまじえてわかりやすく語るため「実態がなく、スタイルだけ」「希望、商人(Hopemonger)」とたたく対立候補支持者の声も遠吠えに終わる。だからこそ、演説の先々で「オバマニア」なる自発的追っかが続々と生まれ、「オバマガール」なる勝手な応援団がセクシーなプロモビデオを作ってヒットさせてしまうのである。

ワシントンがどうしようもなく変化を必要としている閉塞状況にさっそうと登場した、経歴不足かもしれないが可能性に富み、高い理想を掲げるハンサムな40代の若き政治家。といえばジョン・F・ケネディを連想する。実際、ケネディの側近で1961年の大統領就任演説(国があなたに何をしてくれるかではなく、あなたが国に何ができるかを自問してみてください)の一節(有名)の原稿も書いたテッド・ソレンセンもオバマをJFKの後継者として見ている。大衆に語りかけるときのリラクセスしたスタイル。人の心をつかむスマイル(winning smile)とカリスマ性。JFKとオバマの間には共通点が多い、という。

思 えばJFKも、当時の政治家にはありえなかつたカジジュアなファッションで注目を浴びたのだった。政治家のボタンダウンのシ

ヤツなんて、当時としては画期的だった。バラク・オバマの「タイレス」スタイル、袖まくりシャツ姿も、現在のワシントンの政治家のなかでは異例中の異例である。それがただの手抜きスタイルではなく、親しみやすく、かつ勢いのいいIT企業のボスのようでもあるクールでスマートな装いとして好感をもたれていることは、彼が米版「GQ」誌「Mans' World」誌などのファッション誌の表紙を堂々飾る事実からもわかる。ちなみに「GQ」誌の表紙を政治家が飾るのは、ビル・クリントン、アル・ゴアについて3人目、実に15年ぶりとのこと。

JFKがボタンダウンのシャツを通して「変化」「若さ」「親しみやすさ」を表現したように、オバマもスタイルリッチなタイレス袖まくりシャツによって「手詰まり状況に思い切った変化をもたらす」「多様性を感じ、寛容に受け入れる」「大胆不敵なほどに希望を抱く (audacity of hope)」というメッセージを視覚的に伝えることに成功している。タイがないことで「未完成感」もそこはかとなく漂う装いを見えるうちに、母性愛のようなものまで芽生え、オバマが自分に何をしてくれるかではなく、自分がオバマに何ができるかをつい考えてしまうのである。お1つと、そうして、気がつけば私もオバマニア…。

Kaori Nakano
服飾史家。人に会って、話を聞き、そして書くのがライフワーク。UOMOが提唱するエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくひもときます。著書に「モードの方程式」『着るものがない!』(ともに新潮社)などがある。